

夢うつつの記

円地文

田地文子

夢うつつの記



夢うつつの記（書下ろし
遺作中篇） 奥付

昭和六十二年三月二十五日 第二刷

著者 円地文子（えんちふみこ）
（著作権継承者 富家素子）

装幀者 磯谷時子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号 一〇二
電話東京（〇三）二六五局 二二一

定価 一、五〇〇円

印刷 精興社

製本 矢嶋製本

製函 加藤製函

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Motoko Fuke 1987

Printed in Japan

ISBN 4-16-309470-9

夢うつつの記

書下ろし
遺作中篇

長い夏の日が翳って、夕方近くなった頃、寝転んで本を読んでいた父親が、ぱつと起きあがって、

「おい、水を撒くぞ」

と誰に言うともなく口に出すと、浴衣の尻っぱしよりをして、縁側から庭へぱっ

ととび下りた。太って胸の厚い身体だったが動作はすばやく、滞るところがなかった。別に声をかけたわけではないが、六つ七つの娘が後からとび下りてきた。娘も浴衣の尻はしりをして、手には手拭を持っていた。

「バケツに水を持ってきて」

と高い声で呼ぶと、若い女中が、バケツに水を入れて、如雨露と一緒に持ってきた。

「もうすこしちゃんとお尻をはしらないと濡れますよ、お嬢さま」

と彼女は言っ、娘のはしよった着物の裾を一層高くあげてくれた。

父親はもうそのとき裸足で庭土に下りて、バケツの水を手で掬ってバシバシやかけていた。坂の途中にある崖庭で、地面は崖下にあるので、坂からの道を立石や焼け棒杭の庭木めいたつくりで区切っていた。

崖の上に梅のかなりな木が覗きこむように枝を伸ばしている。角地なので庭の隅には石灯籠があつて、そこからなだれおちるように躑躅や梔などが植わっていた。

父親は立ったりしゃがんだりしながら、バケツから手に掬った水をパシャパシャかけていた。小娘はそれを手伝うように小さい金の柄杓で立石に水をかけたり、石灯籠を洗ったりしていた。女の子はまだ学校には行っていないのだろう、ほったが赤くて二重瞼の眼がきわだって大きかった。良家のお嬢さんというより、田舎娘のようにきつい感じの子どもである。角地なので狭く見えるが庭は存外広かった。そこに水を撒きおわるにはバケツを二、三杯換えたであろう。父親は一応水撒きが済むと、縁側に腰をおろして、

「ボウズ、どうした、くたびれたか」

と言った。この家では、女の子にもボウズとか坊やとか使う習慣があつた。娘は

首を横に振り、父親と並んで腰かけた。足がぷらぷら縁側と土の間でゆれていた。頭ばかり大きくて、身体は貧相に痩せこけた子である。家の者はこの子をからかって、ボウフラ、ボウフラといっていた。ボウフラだけではなく、この娘にはたくさんのお渾名があった。「ボウボ」「ミミズク」「コノハズク」「タヌキ」などと呼ばれていた。それはみんな蔑称ではなくて愛称であった。末っ子でこましくれたところのあるこの娘は、一家のペットでもあった。兄と姉とがあるのだが、四つずつ齡が違っているのです、この娘からは大人のように思えた。兄のほかに母方の従兄をその頃預っていたので、中学生の彼らは、末の女の子を可愛がるというより、からかう対象にしていた。

しかし、一番彼女を可愛がっていたのは、父親だったかも知れない。父親は、「ボウズ」「坊や」の他にも「ボッコロ」とか「タヌキ」という名で彼女を呼んだ。

「タヌキ」の上に英語をつけて「スモールダヌキ」というのがあった。後に考えれば、おかしい呼び方なのだが、当人は、一向違和感を感じないで、父親が「タヌキ」と呼ぶと、嬉々としてとんでいった。父親は娘の頭を撫でて、

「どうだ、飯を食ってから散歩に行くか」

と言った。

「うん、行く」

と娘は躊躇なく答える。父親が散歩に行くといえ、すぐそばの上野公園にきまっていた。その家は、公園と下の町との境になっている坂の途中にあるので、公園にはほとんど隣に行くようなものであった。それでも、父親は朝から帝大へ行って、帰ってくるのが夕方近かったから、そういう散歩に行けるわけではなかった。出掛ける時というと、必ずといっていいほど、一緒に連れて行くのはこの末っ

子の娘だった。くりくり坊主に髭を生やした父親とおかっぱの娘は、夕飯の済んだあと、まだ暮れなずんでいる長いそがれの頃、ぶらぶら坂道をのぼり、その先の角にある大きな寺の境内を曲って、音楽学校と美術学校（現在の芸大）の間の道を抜け、博物館の近くへ歩いて行った。見慣れない木があると、娘は振りあおいで、

「これ、なんていう木、お父さま？」

と訊いた。その問いに、父親はたいてい正確な答えをかえした。どんぐりは櫟の木になるのだ、ということや、公孫樹に雌木と雄木があるのだということなど、娘はみんな父親の口から聞きおぼえた。

「椎の木の若芽っていいものだよ」

などということを、娘は、父親から教えられたのだった。公園のなかの道は、いくつにも別れていて、大きな広い道を真直ぐ出ると、上野広小路の通りになる。し

かし、それは散歩の道にはふさわしくないので、父親はいつも途中から小道に曲って、東照宮の石畳の道を歩いたり、精養軒の横を通して池之端の方に行く坂を下りてきたりした。その頃の上野公園は、今のように入物が混んでいないで、大きい木や灌木がたくさん生えていた。なかには、折々の花が咲いていて、その花の名もたいてい父親に教えられた。明治四十年代には、上野の精養軒は、東京でたくさんなかった大きいレストランの一つであった。本館のほかに、池之端に下りる途中のちよつとした広場に、コーヒーやアイスクリームを飲ませる喫茶店があった。そこへ腰かけると、下の道を通して不忍の池がよく見えた。池の中島には、弁天堂があって、その近くに芸者を呼べる料亭があったりした。女の子は散歩のお伴をするのに、たまに父が寄ってくれる精養軒の喫茶店に行くのが楽しみであった。今日は精養軒に寄るかな、と心のうちでは思うのだったが、父親にねだるようなことはしない。

父親もたいていの場合、そこに寄ったりはしないで、不忍の池の横の道に下りて、そこから家までゆっくり帰ってくるのだった。「今日はアイスクリームが食べられるかな」と女の子は家を出るときから考えていたが、たいていはその望みは叶えられなかった。当時はまだ、喫茶店などの発達していなかった頃で、たまにアイスクリームを大騒ぎして家で作ったりしていた。父親は水撒きや散歩のほかには、よく美術館へ娘を連れて行った。日展がまだ文展といった頃で、九月に院展が始まり、十月には文展が開かれた。女の子は絵を見ることも描くことも好きだったので、招待日に父親が出掛けると、一緒に行った。父親も、学校へ行っている上の子どもたちより末の娘を連れて行くことを習慣のようにしていた。招待日には、父の知人の学者やお弟子さんたちがよく見えていて挨拶を交すのが常であった。父が娘を連れているのを見ると、

「お嬢さんですか。可愛い顔をしてらっしゃる」

などと、愛想を言う人もあった。

「先生によく似てらっしゃる」

などと言われると、父は機嫌がよかった。実際、娘は父親に似て、目ばかり大きく、愛想のない顔をしていたが、父親は結構満足していたようである。兄も姉も、母親に似て、ほっそりした身体付きの中高で色白の顔だったから、武骨な父に比べれば、母親に似ているということは、いくらか美人系に思われたに違いない。父親自身も、母親の顔立ちを自慢にしていたらしいのに、末の娘が自分似だといわれると、それを嫌うふうは一向なかった。ときどき、娘を膝の上にのせて、ほったたをつつきながら、

「お前も顔が長くなってきたな。おっ母さんに似てきたぞ。似ている、似ている」

と、からかうように言くと、娘はむきになって、

「違う、違う。お母さまなんかに似ていない」

と、父親の膝を足で蹴って、怒った声で叫んだ。父親に似ているといわれることは、女としてありがたくないことのはずなのに、娘にとっては、それがコンプレックスに感じられなかったのである。

1

今でこそ池之端四丁目という町名にかわっているが、それは昭和三十年代の末頃からのことで、ずっと谷中清水町という町名で通っていた。谷中というのは、墓地で有名なだけでも、三遊亭円朝の牡丹灯籠に谷中幡随院というのが出てきて、幽霊の娘が通ってくる萩原新三郎の家が根津のあたりであったと憶えている。だいぶ成

長してから後に、牡丹灯籠を読んだとき、例のカランコロン、カランコロンという下駄の音がして娘とその乳母が萩原の家を訪ねてくるのが、わが家の近くであることを知った。清水町という町名は、もちろん、明治以降に出来たものである。牡丹灯籠には、そのカランコロン、カランコロンが清水の方から聞こえてくる、と書かれている。すると幽霊の訪ねてきたのは、谷中ではなくて、根津の裏町だったのかも知れない。現在でもそのあたりには、震災にも戦災にも焼け残った古い家が狭い横町に残っているのが見られるから、清水町などと町名のついたのは文明開化のちであらう。

三遊亭円朝は、江戸の末期から明治の中期まで生存していた人で、落語のなかに人情噺という新しいジャンルを作った人として有名である。今であつたら大衆小説家で名をなしたかもしれない。鍋木清方画伯の父君（糸野探菊）と親交があつて清